

翻訳・翻刻

翻刻と解題 『鶉坂集』下

'Usaka-shu' Part II : A Study of Old Texts Re-written in Contemporary Language and Bibliographical Introductions

大西 紀夫

OONISHI Norio

うさかの杖

秋

京洛

名月やにしきを下りて草の上

啼出す虫にどこもとの鐘

秋風の窓に心の烏帽子着て

肥て見たれば疲たうもあり

蕩々として朧ならば八九尺

泊とは推の違ふ瓢箪

新らしい此縁り取の落つかず

おれにひよこの世話をやかする

冬の日のいつ入たとも藪の陰

氏神様も頃日は留主

こなたから恨之介を夢に見て

羽織の裡の赤き恋草

鯉鮓とはねても足らぬけんとん屋

清水焼の芥子の夕月

嗟峨あたり祭をかけて比丘尼共

けふむらさめの濡ぬほどふる

暖なしるしを華の走り咲

笠にかつき交る蝶々

喧嘩せぬ春のかり橋仮の世は

念仏に落て釈迦の名高し

月々におの字がなふてお霜月

はだかに何ンの湯屋の色代

その筈の恋とは知れとなめ過て

恨の角はかたつぶりさへ

夕顔もしらむ蚊遣の宵々に

となりはさびし油碓カラウス

子にゆづる親の異見の宝蔵

巢に秋風の恋の旅

三日月の肌る光に桐の瘦

唐になひ図の華表身に入ム

しら浜に命からく舟つけて

針千本の針に雪散る

胴すねた鴉に一卜箭射て見たし

さる花守のおれも小藤太

輪の内に咲た桜の着衣始

ゆたかに風の行方から吹

孚

仲

推

六

二川

白推

夕燕

蘭酔〔二才〕

一融

川

推

燕

酔

融

川

推〔二才〕

燕

酔

推

川

酔

執筆〔三才〕

秋之部

「(三ウ)

見しはいつ行屋に貝も今日の菊 露沾子  
 鷹首に錆ぬ華咲桔梗かな 二川  
 見てさへも風こそばゆき尾花哉 八菊  
 点々と咲や維摩の鶏頭華 ナゴヤ 鷗白  
 一六夜やしづめて置て萩の音 女 安紫  
 稲妻の柘榴吹懸ク扉かな 閬州「(四オ)  
 柗にもまぎれぬものや猿の尻 万里  
 窓腰に明方はやし蕎麦の花 南政  
 寂しさを礎へ返す木魚かな 芦穂  
 松かぜの色や一ト筋霧の海 蘭酔  
 壺尺の扇子にかへつ秋のかぜ 石動 右橋  
 野を行ば臆病神鳴子哉 全 可省  
 先ひとつ空に実の生る高灯籠 野調  
 寂しさの皮のとれたる一葉哉 カ、 舎十「(四ウ)  
 行秋のしり戸を引や岑の雲 魚ヅ 雨村  
 枝々も根に来て泣くや霊祭 松宇  
 草かりに場をとられてや舞蜻蛉 高岡 為町  
 前の世も渡世もひまなき案山子哉 倚彦  
 そよりとは笹の一夜ぞ星の秋 吾伸  
 中人に寒覚ゆるおどりかな ヲヅ 丈風  
 鳴顔に袂やりたや鹿の声 ナゴヤ 一秀

ひと、せの色を配るや葉鶏頭 全 瓢風「(五オ)

木隠れや鼠の小社下紅葉 松本 正秀  
 鳥羽玉のあふせかくる、二ツ星 全 松琶  
 秋風や不破の雀の七ツおき 野坡  
 朝霧や塔の九輪に晴残り ナゴヤ 藤乃  
 世の中を垣から覗く野菊哉 全女 風式  
 初秋や水に漂ふところてん 大ツ 宰陀  
 両の手を裏懐<sup>ウチ</sup>や晩稲もり ナゴヤ 且栖  
 小男鹿のしとねに啼や萩薄 魚ヅ 貞子「(五ウ)  
 兄弟に割ッてやろうぞ杓瓢 松柯  
 口あけて笠の結しめる野分哉 風介  
 蓑買ふて吹れ出ばや華薄 涼菟  
 その色をたがへず桐の落葉哉 有節  
 七夕やうき世の上におもひ川 ナメリ川 野鶏  
 行秋の骸捨置野山かな 生地 扇之  
 稲妻の契り初日や嶺の松 魚ヅ 甫穂  
 初鷹や皆見る事の鬧しき 同 外故「(六オ)  
 氏も名も花野の果や晒す頸 イクヂ 柳翠  
 裸子の粕に酔てやからす瓜 ナゴヤ 椿又  
 秋風のあたまはつはつるや雲の嶺ブンゴ 朱拙  
 行秋の魂出たり松の虹 山中 桃妖  
 名月や諸鳥もさわぐ藪つゞき 奥桑折 馬耳  
 あきたらぬ草の座鋪や今日の月 ミノ 摘葉

星合に恋のいろはや鹿の声	全	秀陽	亦兵衛が絵の具を愛す花野哉	桜川
水に落てうかぶ瀬も有熟柿哉	全	東仙〔六ウ〕	稲妻の照や捨子のぼんのくぼ	燕説
頼を書柏や木曾の霊まつり	全	千流	よい顔にかづらかけてや十三夜	二川〔八オ〕
聖霊のけふや此世の方がへ	ナゴヤ	林月	猩々の菊のみだれや十三夜	一庸
大仏の鐘やつかずに暮の月	小松	宇中	茸狩や笠あふのけて名取川	白推
青空に秋のまなこや今日の月	今町	陸夜	一雨に來たり野の秋山の秋	高岡
鐘かけぬ <sup>ト</sup> 桂やしたしむ蚕	ヲヅ	巴湫	から肌の日にく寒し岑の秋	全
疲たるが故に貴し菊作り	ナゴヤ	湊沖	明家の月夜覗くや鶏頭花	ナゴヤ
団栗の台座はなる、野分哉	弁水	弁水	織女や二ツ鏡の照くらべ	全
冬瓜やあぶなくの店の上	白推〔七オ〕	百世	理屈にはしめぬ門なり葛の花	素行
猿曳や猿と酒もる露時雨	カヅ	土黒	藻を焼て眉置海士が夜寒哉	鳥焉
一船はいさみて帰相撲かな	僧	生可	烏帽子着てうけつ答つ魂迎へ	ナゴヤ
茸かへの藁屋も見へつ村枹	生地	松波	その頭を上て聞たし鹿の声	カヅ
化物と組する夜の案山子哉	ナゴヤ	和泉	稲妻のかきさかしけり平島	全
ものはみな十番切の野分哉	新庄	鬼蝶	酔の香の涌こぼる、や花木 <sup>カサ</sup> 權	石動
風袋板屋に振ふあつさ哉	居士	居士	待受て朝日おがむや菊作り	全
桐の葉の楔ぬけてや今朝の秋	三川	古調〔七ウ〕	母親は京に生野の美人草	ナゴヤ
鹿小屋を捧て釣なら四手駕籠	信松本	木川	山々のしまつがましや村枹	全
打きれの脈や更行小夜きぬた	一致	胡仲	水汲が笠に着て來る一葉哉	弓丁
夕虹の後光に成し案山子哉	瞽者	蒲蛭	一雨に預りて行残暑かな	渭竹〔九オ〕
狩衣や裾に浪立糸す、き	蘇守	蘇守	分別の底から濁る新酒かな	雨洗
軍場の松に鎧や鳶もみぢ			雨風に寸の隙なき案山子かな	ナゴヤ
千両の手垢もつかず菊の花			夜嵐や後生大事と種瓢	全

飲口に嘗るではなき熟柿哉

一融

ひよ鳥や殊数懸て行梅もどき

故白

這かゝる鶯の上気や石仏

胡仲

碓に水もやとふや晚稲秋

衆允〔九ウ〕

雨脚に爪も出ぬかと散柳

一庸

薺は浄衣の児のひる寝かな

蘭酔

華咲や隠元大豆の登り藤

白推

家込やおのれくが秋の色

二村

幾思案してから咲ぞ菊の花

ナゴヤ

除酉

白無垢に赤蜻蛉のとまり鳧

東白

月額に庸入たる熟柿かな

石動

林従

ひとつ家に秋は来にけり杵の音

ナゴヤ

雲窓〔十オ〕

〔十ウ〕

冬

富山

集りて迎へ拍や神の留守

蘭酔

墻の薨も霜の初華

白推

鐘ひびく暁の山兀として

野調

筆ひねり出す詩の囊から

胡仲

枉もとはしらみこぼる、胸の月

閩州

岩をとり巻浪の涼しさ

烏焉〔十一オ〕

此筋は年貢にもする干シ鮑

一庸

女と見へぬ顔は夜叉神

二川

役済す七ツ入子と産ならべ

有節

屋敷つまりて二階三階

酔

平安の地はこがらしも静なり

推

ふしぎに逢た発心の後

調

有明に鳴かても哉の鶏の声

仲

立て置たる窓の粉白

州〔十一ウ〕

菓ものに目の離れぬ疱瘡子

焉

ひとつ電は雨の瑞相

庸

南枝から花の蕾のすりむけて

川

泥たる事は鳴ぬ鶯

節

ながき日も勸学院の昏安く

酔

茶釜のしりを洗ぬ輪番

推

今降た霰が寒さ置て行

調

餅はしろひに玄猪とは云

仲〔十二オ〕

合鬢と坊主と和田のあたま数

州

覚悟しめたる胸の下燃

焉

水さして今宵も化に朝がらす

庸

枉なりなるあはら戸のすき

川

西海子の莢さらく風と風の音

節

ひとつ残りて谷汲の月

酔

秋の雲広ふし酔めて野雪隠

推注 酔―「さめて」と読むか

課の役のとてからい世の中

調〔十二ウ〕

金欄にくさめして行駕籠の犬

仲

卷かへす曆のすへやみそさゞい

下関 立枝〔十四ウ〕

八十川の水に浪たつ

州

刈柴の跡あたらしや片しぐれ

高岡 丹岫

虹は今夕飯空に鑑のつる

川

笠の雪ならべて見るや橋の上

カ、野角

三宝加持の行なひが濟

庸

凧の足だまりなり藪だゝみ

全 幾弾

奈良酒の樽一对に匂ふ華

焉

つまげてもまたつまげても時雨哉

五菱

天地和する時の種蒔

筆〔十三オ〕

皆人は鼻先あかし寒椿

渭竹

したしさを竹と添寝の水仙花

如子

こがらしの四十八手や嶺の松

一空

衣くばりとりさはぐ坐や龍田河

ナゴヤ 杉月〔十五オ〕

四海浪静にふるや今朝の雪

ナゴヤ 旭山

から鮭も活世イキルやあれ帰り花

全 俵子

夜嘶の片手に着する頭巾哉

女 千代

初雪や呼出す山のあたまでも

カ、樗兮

初雪や嶺よりつゞく天の川

全 蕪守

鶯のすり込竹のしぐれ哉

石動 蛙曰

村時雨里はひらりと戻りけり

肥前女 紫白

鑑ひとつ腰に時雨て豆腐うり

長サキ 古道〔十五ウ〕

吉原にしめり懸けり初時雨

ヒコ 酉東

降物の箔に転じて寒哉

蘭醉

しからる、蚊屋の釣手や煤払

南政

踏わつて来る人もなき氷哉

秀尹

盗人の思案くづる、吹雪哉

ヲヅ亡人 秋幽

冬之部

盗人は冬のものなり梅の華

見龍

神送り案山子やひまのとらせ時

一庸

木のはしのやうに思へど海鼠かな

乙由

昆若もともくすへる海鼠かな

万里

魚盤マナイタに覚悟すはらぬ海鼠かな

蟻城

霰ともはり合つくや梅もどき

白推〔十四オ〕

面篋をあけて素顔の寒哉

倚彦

此時に俣野がおらば雪こがし

ナゴヤ 吟水

炭竈や鬼が城へもほどちかし

全 凍左

無病なる人にも聞や菓喰

全 調子

蚊帳に寝た伸をかゝまる衾哉

二川

寒菊や初花ながら扇さび

有節

手のからむ煮売の蛸の寒哉

備中 正興

みおのやがしころも有や年の市 ヲツ 雨村  
 硝子の格子に遊ぶ氷柱かな 全 丈風〔十六才〕  
 念仏を木の葉と散す十夜哉 京 素六  
 一世界酒に開くや水仙花 鬼蝶  
 年々の捨様替りや置火燵 フンゴ女 りん  
 物の名も相場も括て時雨哉 奥スカ川 晋流  
 あだからき世を見限るや冬籠 全来折 不城  
 相伴に衛ものくや引板の音 木曾福島 還珠  
 隣まで鳴つては来たる村時雨 信松本 正筑  
 冬枯や穴を照らるゝ昼狐 善光寺 未格〔十六ウ〕  
 大黒にまづあやかると丸頭巾 夕燕  
 挨拶の上座におくや初時雨 遅流  
 化されて枯野廻るか木綿売 一通  
 野を隔山を隔や初しぐれ 仙遊  
 かけひきはあなたまかせの海鼠哉 ナゴヤ 初汲  
 寒菊の律気に留主を咲せけり 全 不又  
 こがらしに鞭を添るや松の声 石動 曾林  
 こも僧の笠に合点の落葉哉 田志〔十七才〕  
 冬籠り枕さし居る大工かな 桃扨  
 冬籠る中に一手や帰り花 芦穂  
 敲れて馬の走るやはつ電 松柯  
 ゑひもせすい字を待や年の昏 祐好  
 追れたる浪によりむく衛哉 竹士

おもふほど寝て敲るゝ納豆かな 伯賀  
 冬瓜の行の終りや霜の墻 不及  
 名聞の糊気もぬける紙子哉 亡人 秋幽〔十七ウ〕  
 磨上て我顔寒き鏡かな 白推  
 雲底の魂さむきあられかな 経田 有桂  
 窓ばかり時雨て見せる藁屋哉 滑川 野雲  
 時雨からこぼるゝ磯の千鳥哉 鬼蝶  
 みぞれから踊出せりみそさゝい 女 安紫  
 大勢の寝言聞夜や舟の霜 イセ一ノセ風琴  
 人を非に見る事なかれ水仙花 小俣 大計  
 卑下をして咲や尤冬の梅 同 石露〔十八才〕  
 山彦の世に出る時や冬木立 四日市 鳴之  
 こがらしに息音高し闇のひと 高田 蒐行  
 呉服屋のいたり顔なる昏子哉 全 蘭風  
 地にあらはなどゝ廓の時雨かな 曾洞  
 槽の火に松風吹や釜の沸 素楓  
 隠れ家も見出し聞出し師走哉 一空  
 瓢箪に手綱ゆるさず鉢たゝき 百世  
 義理相の届ばかりや帰花 序要〔十八ウ〕  
 我宿の火影ちからや網代守 野調  
 正月を待空焼や冬のむめ 随柳  
 鐘の音の鐘楼はなれぬ時雨哉 松蘭  
 こがらしに座舗さはがぬ北斗哉 仙子

水茶屋の竈もそのまゝ時雨かな

胡仲

ひか〜と雪も光るや松の月

少年十才鶯吟

茶の華や肉にしたしむ比丘尼寺

蘭酔

醒て行上戸の兒や村しぐれ

随柳〔十九才〕

冬がれに口きく竹のそよぎ哉

白推

鶯の無言おそろし冬の梅

二川

余興

七十二候

萩花人が帰宅を祝す

旅の夢散るや新酒の確に杵

二川

鶴の中をもわたり来る鳥

白推

朝月の山は勿論水はれて

蘭酔

肩と鍬とのひまはないなり

鳥焉

櫃形に負ふて立寄かつら竹

野調

簾から日脚の入レバひる過

胡仲〔二十才〕

酸醬にすりばちひゞく石なりし

一空

網の手柄の巨口細鱗

随風

此たびの勅使は万里小路殿

仙遊

仮名で書れぬ文字が有也

涓竹

猿ばかりお寺は留主に火を焼て

閨州

ぬす人の目のひまは沢山

一庸

只ならぬ腹に帯せぬ糖俵

故白

服沙をかけて祈る淡島

苜蓿〔二十才〕

勝浦も秋の木の葉の散々に

不及

星のひかりを奪ふ有明

有節

うそ寒くかついで戻る番葛籠

南政

はなして来たる頬先の髭

雨夕

ぬき樋から蟬の小川をせき入て

一融

風ひら〜と藍染の絹

随柳

つくろはぬ深山の花の娘ども

序要

ひなよりおもひ初る恋草

曾草〔二十一才〕

鶯もあるに読経は解怠して

素楓

灯籠四本があとさきに行

卜道

大年も唯ねじ藤の亦兵衛

弁水

杜稗チキに目を曳餅アのつき立

夕燕

とり葺の屋根を早ぬく早なれば

風芥

千破劔ながめて長陣の鼻

李洞

絵草紙にかるた交たる小商人

花融

ひがんにちかき鶏頭の朱アケ

二村〔二十一才〕

さす月も竹の末葉の有栖川

和全

律にからめく筆策の音

百世

鱈かく人色々の顔つかひ

築史

家の法度の恋はくせもの

松柯

落てある赤犢鼻褌に主がない

水に塩気の津浪このかた

錫杖も笠も見るほど大師様

苧桶ころんでうみ苧乱る、

雨の日は内が野になる麦の秋

鯛の肥が来る能登船

裂織に襷る嶋の襟さして

年頃までも書て立札

ひる中もうそく暗き梅檀木

降にならぶといもはやし鳥

肌寒きまだ鉢巻の病あがり

柿はあからむ頃か残月

借シ小屋へ八朔まへのとゞけ状

まだ梶原が加増百石

横に咲こゝろの花の見ぐるしや

地獄の沙汰うそにして置

鶏の八声乱る、御ひろ敷

味ひ違ふ寒のふり出し

作り込池田伊丹の江戸向ひ

桐に尾長の天下泰平

一日のあつささまして暮の月

樟脳くさし虫干のあと

母親の息吹かける嫁入まへ

竹土

貫器

如流

衆允〔二十二オ〕

直至

蒲蛸

小字

川

推

醉

焉 調〔二十二ウ〕

仲

空

風

遊

竹

州

庸

白〔二十三オ〕

穂

及

節

慰ながら占や筭きく

馬の尾に巢も喰ふへうの鼠ども

窓に役ある家のよこしま

旅人も貫ひなみだに泣ばかり

むかしを今に梅若の墓

ひよろくと疲て咲たる野撫子

かはくところへ悖坊な雨

わきあがる湯玉に衿宜のゆふたすき

棒にすくめて小賊を追出ス

飛越の橋のひがしは丹波領

うへつけはやき田の黒みやう

むすこには正直太郎慈悲次郎

百里夷中も都はづかし

囀りの時世は今ぞ華に鳥

藤のにほひにやまぶきの照

政

柳

融

夕

要〔二十三ウ〕

洞

楓

道

水

燕

芥

李 花〔二十四オ〕

村

執筆

後序

〔二十四ウ〕

文奎堂の白推子蕉門の学好て正風の

虚実<sup>ニ</sup>に漁獵し四時浩然の気を養ふ術

とす。ことし水無月胸襟に風月の涼を



懐き回が瓢器憲が藜杖を携て名跡

佳境を跨躡し数輩の好士に過て句を

摘、吟席を重ね、その逍遙する所を甘ス。

尾陽の春に起て陰越の冬にむすぶ  
〔二十五才〕

漫興の七十二侯は諸生の名録なり。自他

の句を集めて、あめつちの二まきとなりぬ。

是を梓に寿す所謂鵜坂の杖と題

するは此大神の威霊をかりて冥驗

に照され造化の天極自然を穫て風雅

の大円鏡を磨し万品融通の至誠に

遊んとなり。仍堯井客蘭醉是が

筆耕となりて此跋に云爾。  
〔二十五ウ〕

享保七歳舎壬寅

臘月吉日 印 印

鵜坂集下の終  
〔二十六才〕

京醒井五条上ル町

風月五郎左衛門寿梓  
〔二十六ウ〕

（平成24年10月31日受付、平成24年11月19日受理）

